

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 2 5 5 号

2023 年 7 月 1 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.wjg.jp>

小西芳之助導源先生「コリント人への第 2 の手紙講解説教」より (11)

キリストは弱きゆえに十字架につけられ、復活した

「キリストは弱きゆえに十字架につけられたが、神の力によって復活せられた。」この真理は、生まれながらの我々人間の知恵をもってしては認めにくい真理です。キリストは敵に負け、敵の力で十字架につけられました。誠に弱い。しかし、この十字架についたことによって、人の罪を贖い、そして、その罪の結果を引き受け、復活された。外観は弱い、その弱さの中に、全人類の罪を負ったという。この偉大なる働きが我々には見えません。これで、弟子はみな躓きました。3年間イエスと共に暮らした 12 弟子もこれが分からなかった。私は、信仰というものは、非常に難しいものと思います。教会に来て、牧師からちやほや言われて、分かるものではありません。この前も学びましたが、「汝ら、狭き門より入れ、生命に至る門は狭く、滅びに至る門は広い」。私は、イエス・キリストを信じるということは、誠に単純でありますけれども、これは相

当狭い、難しい道であると思います。これは遊び半分にフラフラしては分かるべきものではない、と確信します。相当、真剣に頭を突っ込んで、力を入れて、数10年やらないと分からない問題だと思います。「人は信じて救われる」と誠に簡単に言いますが、そして、誰でも行けるけれども、大無量寿経には「行き易くして、人無し」と書いてあります。

我々は、キリストは弱きゆえに十字架につけられ、神の力によって復活した、というこの真理を、自分の生活に当てはめて、5年、10年と実験してみなければ分かりません。

イエス・キリストがあなたがたのうちにおられる

「あなたがたは、はたして信仰があるかどうか、自分を反省し、自分を吟味するがよい。それとも、イエス・キリストがあなたがたのうちにおられることを、悟らないのか。もし悟らなければ、あなたがたは、にせものとして見捨てられる。」(コリントⅡ 13.5)

この箇所が本日の最後の教訓の山、クライマックスであると思います。原語では「自分自身」という字が最初に来ています。非常な強調です。君達は、私パウロを検討しているが、汝自身を検討せよ、ということであります。ここで「悟る」という訳はよくないと思います。むしろ「知る (know)」とか、「認める (recognize)」という意味の字であります。「イエス・キリストがあなたがたの内におられることを認めないのか」と。ヨハネの第1の書、第5章12, 13節には、「御子を持つ者はいのちを持ち、神の御子を持たない者はいのちを持っていない。これらのことをあなたがたに書き送ったのは、神の子の御名を信じるあなたがたに、永遠の命を持っていることを、悟らせるためである。」とありますが、この言葉と一緒に覚えておいてください。もし、知らないならば、信じないなら、君たちは偽者として見捨てられるであろう、と言う。これは我々に当てはまった言葉であります。…キリストを信じていなければ、洗礼を受けても、聖餐式に加わっても、信仰の代わりにはなりません。

キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わり

「最後に兄弟たちよ。いつも喜びなさい。全き者となりなさい。互いに励まし合いなさい。思いを一つにしなさい。平和に過ごしなさい。そうすれば、愛と平和の神があなたがたと共にいて下さるであろう。…主イエス・キリストの恵みと、神の愛と、聖霊の交わりとが、あなたがた一同と共にあるように。」(コリントⅡ13.11-13)

こんなに厳しく述べた後に、この「兄弟たちよ」が来ています。「いつも喜びなさい。」と。私は、これは名訳だと思います。……

それから最後に、「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の御交わり、我々一同と共にあらんことを。」とありますが、これは、私がいつも説教の終わりに言う言葉です。数百年にわたって用いられてきたこの祝祷はパウロの言葉から来ています。祝祷は祈りであります。ここでの順序に気を付けて下さい。

「キリストの恵み」が先に来ています。この上に、パウロの全人格、全行動が立っております。キリスト教を学びに教会に来ているのは、このイエス・キリストの恵みを学ぶために来ているのであります。これには時間がかかる。ふらふら来ていたのでは分かりません。「キリストの恵み」、「神の愛」、「聖霊の交わり」が一か所に出て来るのは、ここが初めてであります。これは「三位一体」の神学を言っているのではありません。これはパウロの実験から出て来ています。

信仰には相当の覚悟を要する

信仰は易いか、これは難しい。その証拠に、信仰の分かった人は実に少ない。我々が学校で勉強する数学、語学、社会科学などと同じく難しい。相当精神を入れて勉強しなければ分かりません。分からないままで終わってしまいます。私は、繰り返しこのことを頼んでおきます。その証拠に、イエス・キリストという、神の子に3年間も教えられた選ばれた12使徒でも、十字架の意義が全然分かっておりませんでした。信仰とはそういうものであります。相当の覚悟を要します。

キリスト教道徳は、信仰から流れてくる「信仰の実」

私は、親鸞の宗教に興味を持っておりますが、浄土真宗のバイブル、大無量寿経には、信仰によって救われることが書かれております。しかし、このお経の最後の部分には、行いのことが書いてあります。こういう悪いことをしたら地獄へ行くぞと言って、悪行が羅列されています。しかし、「心を静めて、ひとり善を行なえば、救われる」と書いてあります。ひとりです。他人を見るな、と。このように信仰一点ばかりで救われるという宗旨に限って、後には行ないのことが書いてある。1971年から、またロマ書を学びますが、信仰の問題が終わった後に、パウロは、「あなた方に勧める。あなた方のからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物として奉げなさい」（ロマ書第12章1節）と行ないのことが書いてあります。私は、キリスト教道徳というものは、信仰から流れてくる「信仰の実」として重大であると考えざるを得ません。

パウロを知る上で尊い文章

〔パウロのコリント人への〕第1回目の手紙はなくなっており、第2回目の手紙はコリント人への第1の手紙であります。第3回目の手紙は「涙の手紙」と呼ばれるものですが、これもなくなっておりまして、第4回目の手紙がこのコリント人への第2の手紙あります。無くなった第3回目の手紙の内容は大変きびしいものでありましたので、その結果がどうであったか、とパウロは非常に心配致しまして、テトスを使いに出しました。テトスから、コリントでは自分の手紙が功を奏して、人々が悔い改めて、福音の理解が進んでいるという報告を聞き、パウロは非常に喜び、その喜びの意味を含めた手紙がこのコリント人への第2の手紙であります。喜びと共に、自分が使徒であることを弁明致しました。そして、第3回目の訪問を予定しているから、その時は、こういう心得で私を迎えて欲しいということを書いています。また、その途中に、自分の伝道はこういうものである、ということを書いていきます。この13章からなる手紙の中には、パウロの生涯と、信仰と、そして、自分はどのような者であるかということが赤裸々に書かれています。従って、この書を通じて、パウロがどういう人であったかということが理解できるのであり、誠に貴重な手紙であります。自分の感情を出して語りましたから、信仰の高さ、深さにおいて、他のどの場所でもこれほど重要な言葉を発しなかったであろう、と学者は言っており、難解の書とされておりますけれど、パウロを知る上で尊い文章であります。

パウロの人格が人を教えた

内村先生は、かつて、自分は今もう人に教えることはやめた、自分はこういう者であるということを発表しようと、と決心されたそうであります。パウロは自己をさらけ出すことによって、彼の人格が人を教えました。私は、このコリント後書を学びまして、本当に人を導くということは、どういうものであるかを新たに学びました。誠に、自己表白、自己を表わすこと以外に人を教え導く方法はないのではないかと思います。キリスト教 2000 年において、他の追随を許さざる教師として、大いなる位置を占めているということは、このコリント後書のうちにあると思っています。

現世に始まって来世において完成する永遠不滅の宝

「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである。」(コリント II 5.17)

「新しく造られたもの」(a new creation)、即ち、キリストにあって、キリストを信じて、キリストを受けている者は新しき創造である、と言っています。我々は生まれつきのものとは違う、と言う。聖書の教えるところは、我々の考えているところと如何に違うかということが分かります。神の考えは君達と違うと書いてあります。我々は、悲しみ、苦しみによってがたがたしているのは、この真理が分からないからであります。イエスは、汝ら、悩みはあるけれども、心配するな、父の家には住まいが多い、と言われました。コリント後書を読むことによって、パウロが、現世に始まって来世において完成する、この永遠不滅の宝を確かに持っていたことが明らかに分かります。コリント後書を知らずしてキリスト教は論じられません。ヨハネは、永遠の命と言いますが、ヨハネ伝においては、こんなにはっきり出ておりません。

我々の日常の俗な仕事が聖なる仕事と化する秘訣

金銭は俗なもの、この世のものです。しかし、この世のものを本当に神に捧げるといふ心の根本は、献身から来るとパウロは言っております。……

我々は、この天からの永遠不滅の富を受けて初めて、人に対して与えるという精神、朽ちるべき体を捧げるといふ精神が起こって来るといふ。自分の身体を神にささげるといふ精神が起こって来なければ、信者ではありません。

献金はこの自分を神にささげるといふ精神の現れであるといふ。そうですから、パウロは献金を宗教的な儀式と見ております。私ははじめて献金の意味が分かった時に、献金を集めることが礼拝の一つの行事であることが分かりました。私は、以前、献金を集めることは嫌いでした。説教して金を集めることに抵抗がありました。しかし、私は、60 数年にして、この献金の本当の精神が礼拝の中での行事であることを知りました。

献金の意味が深いといふのは、俗なものが捧げられた時に、聖なるものとなるからです。このことは我々の日常の俗な仕事が、神のために捧げる聖なる仕事となることと似ております。これは大事なことです。俗なる仕事が聖なる仕事と化する秘訣は、我々の心が、本当に神に捧げる精神となること。その時に、俗なるものが聖なるものと化する。これが、万人祭司のルッターの精神であると思います。

パウロは永遠不滅の宝を直接神から示された

パウロは自分を誇ることを嫌いでいたけれども、パウロを使徒ではないとコリントの学者が疑ったものですから、弁明するために、自分も誇ろうと言って、パウロは過去を語りました。パウロが自分の生涯の苦しみを書いたのは、この箇所だけであります。この窓から見れば、パウロが如何に福音の伝道のために苦勞したかがわかります。苦勞した自分の自慢話の中に、自分が啓示を受けたことを述べています。君達は、私を使徒でないと言うが、こういう特別な啓示、黙示を受けたのだと言いました。使徒行伝では、パウロが5回啓示を受けたとありますが、この特別な啓示については触れておりません。私は、これは、パウロが福音の真理を神から直接示されたためであろうと想像します。この啓示はパウロを一生支配し、彼を励ましたのみならず、キリスト教 2000 年を支配した啓示であると私は確信します。なぜなら、この啓示は、人間からではなく、直接神から聞いた、とパウロは言っております。このようなことを言った人は、パウロだけであります。また、自分は地上に生きているよりも、天国に行ってキリストと共にある方が好きである (prefer) と言いました。どちらかといえばそっちを取ると。実に、パウロという人は不思議な人です。永遠不滅の宝を直接神から示されたのではなかろうか、と私は思います。この点については、天国でパウロ先生に聞いてみたいと思っています。

今は救いのとき、恵みの時

その黙示を受けた者〔パウロ〕が黙示を誇らずに、パウロは「自分の弱きを誇る」と言いました。これも、コリント後書で最も注目すべき言葉であります。弱いのを誇る、自分がへこたれていることを誇ると言いました。人間はへこたれることが嫌です。病気になったり、世の中でうまく行かないと、誰でもへこたれます。しかし、その時にこそ、それを誇ると言いました。誠に、驚くべき言葉であります。これを福音という。我々が本当に永遠の宝を持つ者となった時には、この世においてへこたれた時にこそ、天の光をうける。ペしゃんこになっていることは、心に天の光を持っていないことになります。「今は救いの時、恵みの時、いたずらにこの福音を受けるな、十字架の贖い、神の賜物を、今受けよ、今は救いの時なり。」とあります。我々は、本日、この神の和解を受けたい。そして永遠不滅の存在となりたいと思います。

要するに、聖書は地の書にあらずして、天の書であります。人間の書にあらずして、天の書であります。人間の書に在らずして、神の子の書であります。そして、これが分かった時に、本当に自己に克ち、死に克つ力が与えられることを、私は確信します。パウロを見よ。こういう人がかつて人類にあらわれました。祈る、我々もまた、小さなクリスチャンとなって、この時代を照らす人とならんことを。